

森鷗外の奈良滞在時の日記『寧都訪古録』

吉川仁子

文学部 言語文化学科 日本アジア言語文化学コース 准教授

毎年正倉院展の開催される奈良国立博物館新館の横、南大門に続く交差点の近くに木の門が立っている。門の横には「鷗外の門」と刻まれた石碑がある。森鷗外（文久2〈1862〉年1月19日〈太陽暦では2月17日〉～大正11〈1922〉年7月9日）は、大正6年12月に帝室博物館総長兼図書頭の職につき、その職務の一環として正倉院の曝涼に立ち会うために、大正7年から11年にかけて毎年11月に約1カ月間（大正11年5月には英国皇太子の正倉院御物参観に立ち会うため一週間）奈良に滞在した。その際、宿舎とした博物館官舎の門が「鷗外の門」として現在も残されているのである。

鷗外と奈良と言えば、奈良滞在を素材とする「奈良五十首」（第二次『明星』第1巻第3号 大正11年1月）が浮かぶが、ここでは、歌よりも奈良滞在時を記録した日記のほうを見てみよう。鷗外は大正7年1月から亡くなる大正11年7月まで「委蛇録」と題する日記を残しており、初めて奈良に来た大正7年11月の日記は、特に「寧都訪古録」（以下「訪古録」）と題されている。「晴る日はみ倉守るわれ傘さして巡りてぞ見る雨の寺寺」の歌の通り、鷗外は晴れた日は正倉院に詰め、雨で開扉できない日を「マウケモノ」（大正7年11月14日付森シゲ子宛書簡）として古蹟をめぐった。訪れた場所は、法隆寺、東大寺、春日神社、新薬師寺、玄昉塚（頭塔）、般若寺、北山十八間戸、西大寺、平城大極殿址、法華寺、十輪院、物産陳列所、若草山、菅原宇址、喜光寺、垂仁天皇菅原伏見東陵、唐招提寺、薬師寺、郡山城址、発志院、若草山蓄水池、楓滝、香具山、明日香村、飛鳥大仏、岡寺、治田神社、橘寺、川原寺、畝傍・神武天皇陵、高円山、白毫寺、北浦定政の墓、櫛本・柿本神社など、「奈良五十首」の中に取り上げられた寺々も含め、多数に上る。大正八年には、大安寺址、長谷寺、大正10年には、興福寺の慈恩会じおんねという法会の見学をしているが、初年度にして「当地真ノ古蹟ト称スベキモノハ日帰りノ出来ル限り殆ド看尽シ候」（11月18日付森潤三宛書簡）と本人も述べている。

先に列挙した場所の中で、菅原宇址から発志院までは11月14日の雨の一日を利用して訪ねた場所である。この日に訪れた場所は直接には五十首の題材になっていない。昼前に出かけ、西大寺まで車（大軌）で行き、そこから徒歩で菅原家の址（菅原神社から東に少し行ったところにある菅原道真産湯の池の辺りのこと）を経て喜光寺を訪ね、垂仁天皇菅原伏見東陵を拝し、唐招提寺を訪ね、「オベンタウノパンヲタベテ」（11月14日付 子供宛書簡）、薬師寺を訪ね、仏足石並びに歌碑を見、郡山城址を通過して、矢田村の発志院（現大和郡山市

外川町 恵日山 発志禅院)の柳沢氏の墓地で柳里恭(柳沢淇園)の墓を見、里恭や妻、娘、息子の墓誌を写し取り、郡山から汽車で奈良に帰っている。「五里」(11月14日付森シゲ子宛書簡)、20 km程歩いている。健脚だ。この日の日記は墓誌の記録を含むため「訪古録」の中で最も長い。ほかにも、11月22日に古市の北浦定政の墓に詣でた際も、定政とその妻の墓誌を写しており日記が長くなっている。日記「委蛇録」は「訪古録」を含めて全て漢文で書かれている。感想や心情の説明はほとんどなく、簡潔な記録という印象だが、それだけに、記録が詳しい箇所には筆者の関心の現れを窺うことができる。江戸中期の文人画家で多芸多才で知られた柳里恭や、江戸後期の陵墓・条里・宮址研究家で平城京条坊を復原した北浦定政の墓誌を、その家族の墓誌も含めて写し、日記に記すところには、「渋江拙斎」「伊沢蘭軒」「北条霞亭」を書いたのと同種の鷗外の関心を見出すことができるだろう。

日記には、ほかに、正倉院参観者の名前、御物を調査する学者や工芸家の名前、取り扱った正倉院御物の名前などが多く登場する。2016年度の演習で「訪古録」を学生と一緒に読んだが、出てくる人、物、場所、どれも不明な点が続出だった。記述が詳しいと言えば、11月5日の正倉院開扉の条は、開扉の準備から、まさに開封の瞬間のこと、厳重な勅封の様子などが細かく記され、初めての開扉を具に観察する鷗外の関心の高さが窺える。さて、「開北中南三倉。倉之東辺。予架縁棚。懸階梯」これはどういうことを説明しているか？橋本義彦『正倉院の歴史』(吉川弘文館、1997年)掲載の曝涼風景の写真を見て、なるほど、と思った。写真を見ると、正倉院の入り口側の端から端までバルコニーのようなものが取り付けられ、その真ん中辺りに階段が設置されていることがわかる。日本近代文学の研究においても古典や漢文の知識が必要であることは言うまでもないが、「訪古録」を読みながら、まさにそれを痛感した。学生達の奮闘をもとに、今後も「訪古録」と地道に付き合っていきたい。

※ 『月刊大和路ならら』(2018年2月)掲載の記事を一部改めたものである。